



家族の諸側面と情報機器  
斎藤嘉孝

# GLOCOM Review

Volume10, Number01 December 2005

2005年12月15日発行（第10巻第1号通巻81号）

発行人 公文俊平

編集人 豊福晋平

発行 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター

Copyright (C) 2005 Center for Global Communications

GLOCOM Review は、国際大学グローバルコミュニケーションセンター（GLOCOM）と著者が共同著作権を有するものであり、著作権法上の例外を除き許可なく全文またはその一部を複写・複製・転載することは法律で禁じられています。

# 家族の諸側面と情報機器

斎藤嘉孝

## 【目次】

1. 序	04
2. 先行研究	04
3. データ・変数	07
4. 分析結果	09
5. 考察	15
6. 結	19

[要旨]

本稿は、小中学生とその親における情報機器（携帯電話と電子メール）の所有・使用に関して、多側面から分析する。データは、2004年に神奈川県の外地域に居住する571組の親子から収集された。分析結果は次のようにまとめられる。①文化的再生産：親と子の情報機器の所有・使用は類似している。②加齢効果：小学生より中学性のほうが所有・使用している。③男女差：男子よりも女子のほうが所有・使用している。父親は（母親と変わらないほど）情報機器での親子のやりとりをしていると感じている。④家族属性：構造的側面よりも機能的側面のほうが重要で、情報機器での親子コミュニケーション頻度はふだんの対面コミュニケーションと連続している。⑤機器別特徴：携帯電話と電子メールの使用状況は連続しており、電話をするほどメールもする関係にある。こうした研究知見をふまえて、今後ますますの研究蓄積が期待される。

[Abstract]

This study examines several aspects of usage of IT devices (cellular phones and emails) between parents and children. Data was collected from 571 pairs of parents and children who lived in Kanagawa prefecture in 2004. The results of analyses are summarized as followings. 1) Cultural reproduction: Parents' and children's usage of IT devices is similar each other. 2) Age effect: Children of junior high school ages are more likely to have and use IT devices than those of elementary school ages. 3) Gender differences: Daughters are more likely to have and use IT devices than sons, but there is no significant difference between fathers and mothers in the degree of communication with children by IT devices. 4) Family characteristics: Functional aspects play more important roles than structural aspects: frequency of usage of IT devices among family members is positively related to that of their face-to-face communication. 5) Differences in IT devices: Frequency of family members' usage of cellular phones is positively related to that of emails: parents and children who use cellular phones tend to use emails as well. Further research on these topics is desired on the basis of the findings above.

## 1. 序

現在わが国では情報化の進展が叫ばれ、いたるところで携帯電話や個人用コンピュータ（以下、PC）といったいわゆるニューメディア<sup>1</sup>が使用されつつある。ビジネスをはじめ、個人的な楽しみや友人などとの連絡にも、なくてはならないものとなっている。関連して、情報機器は家族生活にも浸透しつつあり、様々なかたちで親子間の情報機器の使用が話題となっている。情報機器を持つことで子とのやりとりがスムーズになった、子が外出していても簡単に連絡がとれるようになったなど、肯定的に捉えられることもあるが、一方で否定的に捉えられることもある。たとえば、親の目の届かないところで子が情報機器を使うようになった、少年犯罪など逸脱行為をするようになったなどである。

1 テレビ・新聞・ラジオなどのマスメディアとの対峙で、しばしばこう称される。

本稿の目的は、家族生活における情報機器の実態を探ることである。具体的には次のような疑問に答えてゆく。すなわち、情報機器は親が持っていないでも子は持っているのだろうか。小学生と中学生では、所有や使用の状況が異なるのだろうか。男子と女子では違った様相をみせるのだろうか。きょうだいの有無あるいは家族とのコミュニケーションのあり方の違いなどで、様相が違ってくるのだろうか。

こうした疑問を、携帯電話と電子メール（以下、メール）について検討してゆく。分析の対象とするのは小中学生とその親であり、小学生は高学年（5・6年生）を対象とする。親子がペアになって収集されたデータを用いて、量的分析を行う。

## 2. 先行研究

本稿では、主に4つの側面から家族と情報機器について議論を行う。第1に、親が情報機器を持っていれば子も持っている可能性が高い、あるいは親が持っていなければ子も持っていない可能性が高いといった議論である。子が小中学生であれば基本的に親と子の階層は同じであ

るから、子の所有物は親と類似したものになるはずである。ブルデュー (Bourdieu 1991) は、こうした状態を文化的再生産として説明し、親の行動様式や生活習慣は子に多大な影響を与え、それを子も再現するという。この論理は、機器の「所有」だけでなく、「使用」においてもあてはまる可能性がある。たとえば、携帯電話をたくさん使う習慣のある親は、携帯電話を多用する子を持つようになると仮定できる。

こうした親子の情報機器の実態に関する研究は、ほとんどなされていないといえる。総務省発行『情報通信白書』の通常の報告範囲も超えており、単純統計値さえも正確に把握されてきたとはいいがたい。さらにいえば、携帯電話と PC では初期コストや操作の容易性などが異なるはずだが、はたして両者の所有・使用状況に、親子の違いはないのだろうか。

第2の論点として、子の年齢が家族の情報機器所有・使用に関係している可能性がある。年を経るごとに価値観や行動様式が変化するのは「加齢効果」とよばれ、様々なテーマで研究されてきた(例、Firebaugh 1997: 6-7; 岡村 1997: 40-1)。その議論に則すれば、小学生と中学生では情報行動も異なると考えられるが、より具体的には、通塾や部活動などにより中学生は小学生よりも帰宅時間が遅くなり、行動範囲が拡大し、それにともない親が携帯電話を中学生に持たせる、使わせることが考えられる。あるいは、子自身も家族から友人へと準拠集団の比重が移行するにつれ、友人が所有・使用していることが自身の所有・使用を促進させるとも想像できる。

しかし反面、小学生が携帯電話や PC を所有し、大人顔負けに使いこなすというイメージがないともいえない。小学生による少年犯罪も話題になっている。はたして実際のところ、小学生と中学生では情報行動が異なるのだろうか。異なるとしたらどの程度なのだろうか。

第3に、情報行動における男女差が先行研究で指摘されている。ひとつには情報処理技能の議論において、男性よりも女性のほうが平均的な情報機器の使用技能においてやや低めであることが報告されている(木村 2004: 76-7, 91)。あるいは、デジタルデバイドの議論によれば、社

会的上位にある集団のほうが情報化の進展による恩恵を享受しやすいといわれ（木村 2001：36-8；斎藤・木村 2004）、男性よりも女性のほうが一般的には不利をこうむるともいえる。

さらに、階層的な視点以外にも情報行動の男女差を指摘する研究がある。たとえば、成人男性は携帯電話で連絡をとる相手として仕事上の人脈が多いのに対し、成人女性は友人・知人や家族が比較的多いことを報告している（松田 2002：135）。また、大学生について、女性はコミュニケーションを目的として使用する傾向にあるのに対し、男性はいわば視聴型で、受身の使用が多いと報告されている（豊福 1998）。こうした研究からは、女性のほうが男性よりも情報機器使用に積極的な姿が示唆される。

はたして男女の違いは、子どもの情報行動においてあらわれるのだろうか。だとしたら、どういう形態においてなのだろうか。家族関連で、男子と女子に行動差があることは他の側面でも報告されており、家庭の居心地のよさの影響の違いや（斎藤 2005）、女子の親との会話の多さなどが指摘されている（土谷 1996）。こうした知見が情報行動にもあてはまるかどうか、まだ研究蓄積が十分とはいえない。

第4に、家族形態との関連である。今日の言説において、「孤立した人は、さびしさを紛らわすために情報機器での人づきあいをしがちだ」といった個人像が誇張されることがある。それは、20世紀の初頭から中葉に旺盛となった大衆社会論の発想と根本で共通している（Riesman 1953；Mills 1956）。大衆社会論では、地域や家族といった中間集団が解体し、現代人は直接他者とかかわる機会が少なくなったという。そこで、とかく非人格的なコミュニケーション手段（つまりマスメディア）に頼るようになるというのが、論点のひとつである。この理論に沿えば、他者とかかわりの少ない人のほうが情報機器の使用は多い可能性がある。よって、家族形態に関しては、二人親よりも一人親の子どものほうが、あるいはきょうだいのいる子よりもいない子のほうが、情報機器でのコミュニケーションをさかんに行うと理論的には考えられる。

別の根拠として、資源の配分が考えられる。家族成員数が少なければ、一人あたりにかけられる資源すなわち時間・心理的配慮・経済的投資などは大きいことが予想される。この点でも、一人親やきょうだいのいない家族のほうが、情報機器の所有・使用はさかんかもしれない。

さらに家族に関していえば、こうした構造的側面だけで十分な議論ができるとはいえない。つまり機能的側面として、親子がふだんコミュニケーションしているか否かも考慮すべきだと思われる。実際、親子関係の研究ではないものの、ふだんのコミュニケーションと情報機器でのやりとりの連続性を示す先行文献は複数存在する（仲島ら 1999；橋元ら 2000；松田 2002）。情報機器の役割として、それまで薄かった仲を強めるよりも、むしろ既存の仲を強化するというのが、その論調である。こうした点も以下の分析では視野に入れてゆきたい。

### 3. データ・変数

本稿で使用するデータは、2004年秋に筆者らによって収集されたものである。小学校高学年（5、6年生）、中学生1～3年生とその親が対象となり、親と子をペアとして質問紙が配布・収集された。子ども票は学校での集合法によって、あるいは自宅に持ち帰って回答された。親票は子が持ち帰ったものに自宅で回答してもらい、学校で回収された。調査協力校は神奈川県A町の5校（小学校3校、中学校2校の対象学年全員）、B市の小学校2校（特定クラスのみ対象）、C市の中学校1校であった。いずれも都心から電車で1時間前後の郊外地域である。有効回答者数は571組であった。

以下の分析では、情報機器の「所有」と「使用」にわけて、関与する変数との関係を順にみてゆく。分析で使用する変数は、表1.1と表1.2に一覧している。

情報機器に関するところでは3種類の指標を用いる。(1)「所有」に関しては、親子それぞれに対しての「携帯電話所有／非所有」「PC所

有／非所有」をみる。(2)「使用」に関しては、情報機器を所有している親子における「携帯電話を使用する／しない」「PCのメールを使用する／しない」でしらべる<sup>2</sup>。(3)親子がいかに情報機器でコミュニケーションをとっているかの指標として、「携帯電話を使用する／しない」「携帯電話のメールを使用する／しない」「PCのメールを使用する／しない」をみる<sup>3</sup>。

こうした情報機器の所有・使用と関与する変数として、上述の議論に基づき、「年齢（小学生／中学生）」「性別（男子／女子）（母親／父親）」に注目する。家族に関連したところでは、構造的側面として「(子の)きょうだいあり／なし」「一人親／二人親」、家族の機能的側面として「ふだんのコミュニケーション頻度（おしゃべりする／しない）」を用いる<sup>4</sup>。

以上の変数に注目して分析を行うが、分析方法はクロス表におけるカイ2乗検定である。本稿は、仮説検証よりも記述統計による全体把握という意味合いが強いため、多変量解析は行わない。また例数があまり多くないことも、多変量解析よりもクロス表分析の適する理由といえる。

2 もともとの質問紙では4カテゴリーだったが（「よく使う」「たまに使う」「あまり使わない」「ほとんど使わない」）、本稿の分析のため2カテゴリーとした。

3 質問紙では「よく使う」「たまに使う」「あまり使わない」「ほとんど使わない」の4カテゴリーだったが、2カテゴリーとした。

4 平日に子と楽しくおしゃべりするかどうかという質問に対し、4カテゴリーの回答だったが（「よくする」「たまにする」「あまりしない」「ほとんどしない」）、結合させて2カテゴリーとした。

表 1.1 使用変数の記述統計 1 (%)

		親	子
所有 (N=448)	携帯電話	92.9	43.5
	PC	48.9	8.9
使用 (N=110)	携帯電話	86.4	80.9
	PC メール	57.3	51.8
機器での親子 コミュニケーション (N=110)	携帯電話	53.6	---
	携帯メール	59.1	---
	PC メール	6.4	---

表 1.2 使用変数の記述統計 2

変数	(%)
小学生	52.5
男子	53.1
母親	91.1
きょうだいなし	11.6
一人親	28.1
親子おしゃべり	92.8

表中は同時に、中学生 47.5%、女子 46.9%、父親 8.9%、きょうだいあり 88.4%、二人親 71.9%、親子おしゃべりしない 7.2%、ということでもある。

注：N = 448。

## 4. 分析結果

情報機器に関して、以下では所有状況と使用状況を区別して考えてみたい。注目するのは、上で論じた4点である。

表2は、携帯電話とPCの所有における親子の類似性をみたものであり、親と子の所有状況が有意な相関を示している。つまり、親が所有していれば子も所有している傾向にあり、逆に子が所有していれば親も所有している傾向にある。具体的には、親が携帯電話を所有している場合、子は44.7%が所有しているが、親が所有していない場合、子は28.1%しか所有していない。またPCは、親が所有していると子は11.9%が所有しているが、親が所有していないと6.1%しか所有していない。

表2 親子の機器所有状況

	携帯電話(%)	子所有	
		N	PC (%)
親所有	44.7*	416	11.9*
親非所有	28.1	32	6.1

注：N=448。\* P<.05、\* P<.10。

次に、子の年齢と情報機器所有の関係についてである。表3によれば、中学生のほうが小学生よりも所有率が高いのがわかる。たとえば携帯電話は、小学生の約2割が所有しているが、中学生では約7割も所有している。

表3 子の年齢（小中学生別）と機器所有状況

	子所有 (%)	
	携帯電話	PC
小学生 (n=235)	20.9***	5.5*
中学生 (n=213)	68.5	12.7

注：N=448。\*\*\* P<.001、\* P<.05。

次は、子の性別と情報機器所有の関係である。表4によれば、女子のほうが男子よりも高い所有率となっている。携帯電話の所有は、男子が約37%なのに対し、女子は約51%である。これは推測に沿う結果である。ただし、PCには必ずしもあてはまらない。

表4 子の性別と機器所有状況

	子所有 (%)	
	携帯電話	PC
男子 (n=238)	36.6*	9.2
女子 (n=210)	51.4	8.6

注：N=448。\* P<.05。

また、この結果が小学生と中学生どちらにもいえるかを検証するため、統制変数として年齢を導入して、カイ2乗分析を試みた（表の掲載は割愛）。すると、小学生でも中学生でもやはり女子のほうが所有率は高かった。ただ、その差は小学生よりも中学生のほうが大きくなっていた<sup>5</sup>。しかも、これもPCにはあてはまらなかった。

5 所有する子の割合は、小学生 (n=235) では男子 16.5%、女子 25.9%であり、中学生 (n=213) では男子 59.5%、女子 78.4%だった。

さらに、親の性別と情報機器所有の関係も検討したい。結果を示したのが、表5である。携帯電話を所有しない父親は皆無であった。また、母親の携帯電話の所有率も高く、9割を超えていた。PCについては、父親の7割以上が所有しているのに対し、母親で所有するのは5割弱であり、有意差がみられた。

表5 親の性別と機器所有状況

	親所有 (%)	
	携帯電話	PC
母親 (n=408)	92.2 <sup>+</sup>	46.6 <sup>**</sup>
父親 (n=40)	100.0	72.5

注：N=448。\*\* P<.01、<sup>+</sup> P<.10。

次に、家族の状況と情報機器所有の関係に注目したい。まずは家族形態であり、きょうだいの有無で情報機器の所有が異なるか否かを検討す

る。表6がその結果であるが、有意差はみられず、きょうだいの有無は子の情報機器の所有とあまり関係がないように思える。これは親にもいえる。

同様のことは、家族形態のもうひとつの側面としての、一人親か二人親かで区別した分析にもいえる。結果は表7に示されている。

表6 きょうだいの有無と機器所有状況

	子所有 (%)		親所有 (%)	
	携帯電話	PC	携帯電話	PC
きょうだいあり (n=396)	42.2	8.8	92.9	49.7
きょうだいなし (n=52)	53.8	9.6	92.3	42.3

注：N=448。

表7 一人親／二人親と機器所有状況

	子所有 (%)		親所有 (%)	
	携帯電話	PC	携帯電話	PC
一人親 (n=126)	40.5	7.9	94.4	50.8
二人親 (n=322)	44.7	9.3	92.2	48.1

注：N=448。

以上、家族生活と情報機器所有の関係を見てきたが、所有状況だけでなく、所有する個人がどれほど実際に使用するか／しないかという「使用」状況も重要な側面である。以下、所有する親子のみに対象をしぼるため、N=110として分析を進める。例数が少ないために有意差が出にくいことを考慮し、カイ2乗での有意検定の結果には過度にとらわれないことを断っておく。

まず、親子の類似性についてである。表8は、情報機器を用いて親子それぞれが他者とコミュニケーションする頻度をみている。携帯電話についていえば、親子の使用頻度はやや関係がありそうである。携帯電話を多く使う親のうち、子も多く使うのは約8割強であるが、多く使わない親のうち、子が多く使うのは7割強である。PCのメールでも同

様の傾向がみられる（例数の少なさのためか、カイ 2 乗検定は有意と  
ならなかった）。

表 8 親子の機器使用頻度

	子使用多い			
	携帯電話 (%)	N	PC (%)	N
親使用多い	82.1	95	54.0	63
親使用少ない	73.3	15	48.9	47

注：N=110。

親子の使用頻度の類似性とは別に、通話相手が誰なのかを知ることは  
意義深いだろう。特に子は仕事で使うわけでもなければ、知人が成人ほ  
ど多いとも思えない。その意味で子の連絡相手は親以外きわめて限られ  
ると想像される。

表 9 のコラム①は、子に携帯電話での一番の通話相手を問うた分布  
である。ここから、子の相手で比重が高いのは母親であることがわかる  
(42.2%)。しかし、それ以上の比重を占めるのは友人である (45.9%)。  
他方、父やきょうだいなどは比重が低かった（順に 6.4%、1.8%）。

これを年齢別にみたのが、表 9 のコラム②と③である。ここから、友  
人を通話相手とするのは加齢と関係することが明白である。すなわち、  
小学生では母親を一番とするのが約 73% であり、友人は約 13% でしか  
ない。しかし、中学生になると友人が約 58% で、母親は約 30% と大き  
く逆転している（有意差  $P < .001$ ）。

表 9 子の一番の携帯電話通話相手 (%)

一番の通話相手	①計	②小学生	③中学生
母親	42.2	73.3	30.4
父親	6.4	10.0	5.1
きょうだい	1.8	0	2.5
祖父	0	0	0
祖母	0	0	0
友人	45.9	13.3	58.2
その他	3.7	3.3	3.8
計	100	100	100

なお、父親はいずれにしても少なく、小学生で10%、中学生で約5%だった。また、この「一番の通話相手」に関して、年齢差だけでなく男女差による統制も行ったが、大きな変化はみられなかった。

次に、親子がどれほど情報機器を親子のコミュニケーション手段として活用しているかをみてみたい。加齢効果、性差、家族の状況から検証してゆく。これらの分析に際しては、携帯電話の通話とPCのメールだけでなく、携帯電話のメールについても扱う対象とする。

まず加齢効果について、表10に結果が示されている。概して、携帯電話の通話もメールも、小学生より中学生のほうが親子間の使用が多いのがわかる。携帯電話の通話は、小学生とその親では約47%なのに対し、中学生では約56%である。しかし、PCメールはこの限りではなく、小学生も中学生も6～7%でしかない。

表10 子の年齢（小中学生別）と機器による親子コミュニケーション

	機器での親子コミュニケーション (%)		
	携帯通話	携帯メール	PCメール
小学生 (n=30)	46.7	50.0	6.7
中学生 (n=80)	56.3	62.5	6.3

注：N=110。

次に、男子と女子を別にしたのが表11である。概して、女子のほうが親とのコミュニケーションに情報機器を使用している傾向がみとれる。たとえば携帯電話の通話では、女子とその親の約57%が使用するのに対し、男子とその親で使用するのは約49%である。ただし、PCについてはあまり差がみられず、多くの親子が利用しているともいいがたい（男子4.3%、女子7.9%）。

表11 子の性別と機器による親子コミュニケーション

	機器での親子コミュニケーション (%)		
	携帯通話	携帯メール	PCメール
男子 (n=47)	48.9	55.3	4.3
女子 (n=63)	57.1	61.9	7.9

注：N=110。

さらに親の性別でみたのが表 12 である。注目したいのは携帯電話の通話であるが、母親（51.0%）よりもむしろ父親（83.1%）のほうが使用すると結果だった。この解釈は次節にて行いたい、少なからず父親は使用が少ないとは答えていない。同様のことは携帯電話と PC のメールにもいえる。予測と異なり、母親との目立った差はみられない。

ここで親と子のどちらが先に電話をかけたりメールを送ったりするかは興味深いところだが、質問紙において扱われていなかった。その点での性差も含めて、今後考慮が必要な課題である。

表 12 親の性別と機器による親子コミュニケーション

	機器での親子コミュニケーション (%)		
	携帯通話	携帯メール	PC メール
母親 (n=96)	51.0	59.4	6.3
父親 (n=14)	83.1	57.1	7.1

注：N=110。

最後に、家族の状況をみてみたい。表 13 はきょうだいの有無と親子コミュニケーションの関係をみたものであるが、結果に意味のある関係があるとはいいがたい。確かにきょうだい「あり」と「なし」では差がみられ、たとえばきょうだい「なし」のほうが親子で携帯電話の通話をする傾向にある。しかし、この傾向は携帯電話のメールで逆転する。さらに PC ではほとんど差がみられない。詳細は次節にて議論したいが、こうした結果から論理的な解釈をするのは容易でない。

似た傾向は、「一人親か二人親か」の分析でもみられる（表 14）。これも論理の通った解釈はしがたい。

表 13 きょうだいの有無と機器による親子コミュニケーション

	機器での親子コミュニケーション (%)		
	携帯通話	携帯メール	PC メール
きょうだいあり (n=95)	52.6	62.1	6.3
きょうだいなし (n=15)	60.0	40.0	6.7

注：N=110。

表 14 一人親／二人親と機器による親子コミュニケーション

	機器での親子コミュニケーション (%)		
	携帯通話	携帯メール	PC メール
一人親 (n=29)	62.1	58.6	6.9
二人親 (n=81)	50.6	59.3	6.2

注：N=110。

そうした家族の構造面ではなく、機能面に注目したのが表 15 である。機能面としてここでは「対面でのコミュニケーションをふだん行っているか否か」に注目する（「おしゃべりする／しない」）。「おしゃべりしない」の例数が少ないものの、結果は興味深い。たとえば、ふだんおしゃべりをする親子の約 46%が携帯電話で通話するのに対し、ふだんおしゃべりをしない親子がそうするのは約 21%でしかない。この傾向は携帯電話のメールも同様である。要するに、ふだんのコミュニケーションと情報機器でのコミュニケーションの頻度は、連続しているように見えるという結果である。

表 15 おしゃべりと機器による親子コミュニケーション

	機器での親子コミュニケーション (%)		
	携帯通話	携帯メール	PC メール
おしゃべりする (n=103)	45.7	42.4	5.9
おしゃべりしない (n=7)	21.2	33.3	4.0

注：N=110。

## 5. 考察

以上の分析結果に対し、ここではより踏み込んだ解釈を行ってゆきたい。第 1 に、親と子の類似性に関してである。これはそもそもブルデューの階層論 (Bourdieu 1991) に論拠を発するが、情報機器の所有についてはある程度あてはまるといってよい。つまり、携帯電話と PC の両方で、親と子の所有・使用に関係性がみてとれる。こうしたことから、情報機器の所有・使用について、親が持っていないのに子は持っている、あるいは親があまり使わないのに子はたくさん使っているといった状況

は、一般的なケースとはいいがたい。

携帯電話や PC は、とかく子どもが所有・使用していると、「親だって使いこなせないのに」あるいは「最近の子は機器に詳しくて、大人顔負けだ」などのイメージで語られることが少なくない。しかし、本稿の結果が示すところでは、多くのケースで親子の情報行動は類似している。たとえ子どもの情報機器使用が過度に取りざたされる言説があろうと、そうしたケースはさほど一般的でないと思認すべきだろう。

ただし、因果関係には慎重になるべきといえる。本稿で見出したのは、親と子の所有・使用における相関であって、因果関係ではない。親が所有するから子が所有するようになるのか、逆に子が所有するから親が所有するようになるのか、それは今回の分析では特定できない。両方ありうるとするのが現時点での妥当な解釈かもしれないが、あえてどちらの可能性が高いかといえば、所有率の高さ（表 1.1 によれば、親 92.9%、子 43.5%）や一般的な家庭内での親の権限からみて、親の所有が子の所有に影響を与えることのほうが多いだろう。

第 2 の論点は加齢効果だった。携帯電話と PC の所有率は、予想に違わず小学生よりも中学生のほうが高いとの結果だった。それは小学生よりも中学生のほうが情報機器を必要とすることを示唆するかもしれない。中学生は通塾や部活動などで自宅外で過ごす時間が増え、親と一緒にいることが小学生よりも少なくなり、その分、情報機器のコミュニケーションが多くなる可能性はある。イメージとしては、小学生がランドセルを背負いながら携帯電話で連絡する姿もないではないが、それはステレオタイプに近く、多数派とはいえないようだ。このことは、携帯電話の通話とメールの両方でいえる。

PC の加齢効果に関しては、大学生あるいはそれ以上になって、別居してからのほうが大きな差がでてくるのかもしれない。同居家族であっても携帯電話のメールが頻繁に用いられているのとは事情が違うようである。

加齢効果に関して、携帯電話の通話相手は母親から友人に比重が移る

ことも見出された。だが、依然として母親の比重が大きいことには変わりはなく、中学生になると母親以上に友人と連絡するようになるというのが実情だろう。つまり、中学生は絶対的な連絡頻度が多くなるといえよう。実際、補足的分析として「他者との携帯電話コミュニケーションの頻度」(表8で使用。親子通話とは限らない)を小中学生別に検証したが、小学生では60.0%がよく通話すると答えたが、中学生では88.8%だった( $P<.01$ )。一方、親については、小学生を持つ親でよく通話すると答えたのは90.0%、中学生の親で85.0%と有意な差はなかった。要するに、子は依然として母親と通話するものの、圧倒的に友人との通話が多くなる傾向にあるといえる。

第3に、男女差についていくつかの知見が得られた。まず携帯電話だが、女子のほうが所有率は高く、特にそれは小学生よりも中学生で顕著だった。親にとってみれば、女子は犯罪などの関連から心配をしやすいのだろうか。あるいは、周りが持っていることへの同調性を気にする傾向が、女子のほうが強いのだろうか。

「使用」に関しても、女子のほうが親子のコミュニケーションに携帯通話やメールを多用しているようだ。このことは、女子は通話だけでなく、メールという文字文化も重視していることを示唆している。つまり、会話をとりわけ重んじるというより(土谷1996)、通話であれメールであれ、女子とその親にとって「連絡」が重要なかもしれない。

もうひとつの性差である親の性別と情報機器の関係については、父親の携帯電話所有率は100%だった。これほど普及率が高いという結果も、我々の常識的な感覚から遠いものではないだろう。むしろ、100%から大きく外れるほうが偏りのある結果と考えられる。母親の所有率も9割を超えていたが、不自然な結果とはいえない。

また「使用」については、父親と母親はどちらも子と情報機器でコミュニケーションをとっているとの結果だった。携帯電話の通話に限って言えば、父親のほうが母親よりも高い数値を示しており、これはコミュニケーション論の文脈からは意外だったといわねばなるまい。しかしその

結果を、実際に父親が通話していると理解するのは難しい。客観的には母親ほど情報機器でコミュニケーションしてはいるけれども、自分はしていると主観的に感じているだけかもしれない。質問紙での該当項目の訊き方は「よく連絡するかどうか」という、ある意味で主観的な尺度であった。具体的・客観的な使用頻度を訊く質問項目ならば、今回の結果ほど高い割合にならない可能性は指摘できる。

第4に、家族構造と情報機器に関しては、きょうだいがいようがいまいが、あるいは一人親だろうが二人親だろうが、情報機器の所有・使用に大きな差はみられず、筋の通った解釈は難しいといわざるをえない。当初の予測としては、一人っ子あるいは一人親の家族では、資源の配分やさびしさの問題から、所有・使用が多だろうと予想された（Riesman 1953; Mills 1956）。しかし、いずれも十分な実証的支持は得られなかった。

それよりも、家族に注目するならば、構造よりむしろ機能が意味を持つことが示唆された。つまり、ふだんの対面コミュニケーションをよくする家族のほうが、携帯電話でのやりとりが多いという傾向である。そうした家族のほうが、ちょっとした連絡事が簡単にできるためだろうか、あるいは仲のよさが対面と情報機器のコミュニケーションの両方に反映されているのだろうか。携帯電話には友人・知人間の既存ネットワークを強める機能があるというのが先行文献の指摘だが（仲島ら 1999；橋元ら 2000；松田 2002）、その指摘は親子関係にも拡大できることを、本稿では指摘したい。要するに、「ふだんのコミュニケーションの延長」として情報機器でのコミュニケーションがあるのであり、その「連続性」が重要なのである。よって、たとえば日常的に会話はしないが情報機器を介してならば頻繁に連絡しているという図式は、一般的な家族にはあまり適応できない。

最後に、各種情報メディアによる違い、つまり携帯電話とPC、あるいは通話とメールにどのような違いが見出されるかを論じたい。まずPCに関して男女を比較すると、女性にとってやや遠いメディアである

との結果だった。これはデジタルデバイドあるいは情報処理技能の議論（木村 2001;2004:80-6 など）に、あらたな根拠を与える結果となった。特にデジタルデバイドの議論では、社会経済的地位の上位者にとって情報機器は有利に働くとの主張があるが、本稿においては男性のほうが女性よりも情報機器の普及率は高いことが示された。

携帯電話についていえば、家族生活に大きな役割を担っているようだ。少なくとも、小中学生とその親にとっては、コミュニケーション手段のひとつとして十分に機能している。そもそも情報処理技能の議論では、PCは技能の高さと関連があるが、逆に携帯電話は低さと関係しているとの報告がある（木村 2004）。しかし、親子のコミュニケーションにおける機能性では携帯電話は優れており、決して否定的な面ばかりではないと、本稿の結果からいってよい。

通話とメールについては、あまり違いがないことがわかった。いずれの変数との関係においても、大きな違いはみられなかった。すなわち、メールは通話の延長として携帯電話上で使用される傾向にある。会話でのやりとりがあつてこそ、メールも使用するという図式である。実際、携帯電話の親子コミュニケーションにおいて、通話が少ない場合にはメールのやりとりも少ない傾向にあるが（72.5%）、通話が少ないのにメールはよく使用するというケースはさほど多くなかった（27.5%）。ふだんの会話あつてこそその携帯電話コミュニケーションであり、さらには携帯電話の通話があつてこそその携帯メールである、という「連続性」はここでも指摘される。

## 6. 結

本稿では、近年発達の著しい情報機器が、どういった家族で所有され使用されているのかという具体像を把握し、その意味をつかむことを主眼とした。ひとつには親子の類似性が指摘され、親と子の所有や使用は似通ったものであることがわかった。また人口学的側面をみると、加齢

効果という点から（小学生より）中学生が、ジェンダーでは（男子より）女子が、所有も使用も多いことがわかった。あるいは親の性別では、意外にも、父親が母親と変わらないほど情報機器で親子コミュニケーションをしていると感じていることが見出された。

さらに家族については、構造よりも機能のほうが関与していることがわかった。一人っ子や一人親だからといって、情報機器を所有し通話やメールを多用するわけではなく、むしろ家族形態はどうあれ、ふだんのコミュニケーションといった機能的な側面のほうが重要であり、その意味で「対面コミュニケーションとの連続性」が指摘できた。

また機器の違いに焦点をあてれば、家族生活への貢献については、携帯電話のほうがPCよりも大きいのではないかとの可能性を指摘した。さらに、通話とメールの性質は、互いに別個のものではなく、やはり「連続性」が重要だろうと指摘した。

家族生活における情報機器の現状に関する研究は、十分に蓄積されてきたとはいいがたい。本稿はそうした現状を鑑み、細部の分析や複雑な仮説検証を行うことより、まずは包括的に情報機器と家族の関係を議論しようとした。ここでなされた議論を契機として、さらなる研究が進展することを期待したい。

齋藤嘉孝（さいとう・よしたか）

国際医療福祉大学 国際医療福祉総合研究所 常勤研究員

[引用文献]

- 1) Bourdieu, P. [1991] *Language & Symbolic Power*, Cambridge: Harvard U. Press.
- 2) Firebaugh, G. [1997] *Analyzing Repeated Surveys*, Thousand Oaks: Sage Publications.
- 3) 橋元良明・是永論・石井健一・辻大介・中村功・森康俊 [2000] 「携帯電話を中心とする通信メディア利用に関する調査研究」『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』14：83-192.
- 4) 木村忠正 [2001] 『デジタルデバイドとは何か』岩波書店.
- 5) 木村忠正 [2004] 「リテラシーと信頼」、橋元良明代表『インターネット利用に伴う情報格差、対人関係希薄化の分析』平成13～15年度科学研究費補助金研究成果報告書：66-116.
- 6) 松田美佐 [2002] 「ケータイ利用から見えるジェンダー」、岡田朋之・松田美佐編『ケータイ学入門』有斐閣選書：125-45.
- 7) Mills, W. [1956] *The Power Elite*, New York: Oxford U. Press.
- 8) 仲島一朗・姫野桂一・吉井博明 [1999] 「移動電話の普及とその社会的意味」『情報通信学会誌』16 (3)：79-91.
- 9) 岡村清子 [1997] 「エイジングの社会学」、岡村清子・長谷川倫子編『エイジングの社会学』日本評論社：11-43.
- 10) Riesman, D. [1953] *The Lonely Crowd*, Garden City: Doubleday.
- 11) 斎藤嘉孝 [2005] 「家庭環境の学業成績への影響—男女差は存在するか」『季刊家計経済研究』67.
- 12) 斎藤嘉孝・木村忠正 [2004] 「情報化社会における合理的無知—デジタルデバイド意識の集団差は存在するか」『日本社会情報学会学会誌』16 (2)：45-58.
- 13) 豊福晋平 [1998] 「大学生の情報生活に関する質問紙調査」『GLOCOM Review』3 (5)：1-16.
- 14) 土谷みち子 [1996] 「思春期の親子関係・友達関係との関連」『家庭教育研究所紀要』18：20-33.